

# 序章　自分が解放されるよろこび

## 1 はじめに

私は、道徳学習や人権・部落問題学習の授業実践を中心に、実践記録『よろこび』を第1号から第3号までまとめている。それは、藍住中学校、瀬戸中学校、板野中学校での取り組みであるが、これまでの教職20年、そのうち16年の学級担任としての嘗みを振り返るとき、その授業内容は大きく変わってきた。

その大きな要因は、やはり板野中学校での全体学習であった。私はこの全体学習を土台に据えた道徳学習や人権・部落問題学習の授業実践の中で、私自身の人生観を大きく変えていくことになり、当然様々な教育活動が全く違ったものになってきた。

この全体学習の実践は、板野中学校同和教育実践記録『峠を越えて』にまとめられ、すでに10冊が刊行されているが、それは、私自身が人間として解放されていく嘗みであった。これからの道徳学習や人権・部落問題学習のあり方を追究していくために、実践記録『峠を越えて』－全体学習が拓く教育のよろこび－をまとめたいと考える。

## 2 全体学習とは

全体学習は1990年5月25日、板野中学校の体育館において、当時の板野中学校の2年生が実施し、それが今日まで続いている学習形態である。この学習形態による授業実践は、第46回全国同和教育研究大会徳島大会等で全国にその取り組みが発表され、徳島県内だけではなく、西日本の各地で同和教育の形骸化、空洞化を打破していく取り組みとして広がりをみせてきた。

それは、それぞれのクラスの道徳学習や人権・部落問題学習の中身を学年全体で検証し、高めていこうとするものである。つまり一学級だけの密室的な学習ではなく、学年の学習者全員が一堂に会し、自分の思いや願いを述べ合い、他の人の思いや願いを自分自身に重ねて、自己を確立し、それぞれの生活を高め、学年全体で差別やいじめをなくしていくことをねらいとしてきた取り組みである。

この学習形態は、授業者の想像を超える学習者の勢いを生んでいき、一つ一つの発言がその学習を深めていくことにつながり、学習者の問題意識を高めていくことになる。初めての全体学習の題材は、社会科歴史的分野で学んだ「渋染一揆」の学習をより深めるものであったが、一つの学級の公開討論を問題提起として、学年全体の討論でその公開討論で出された問題を考え、より深めていく授業展開になっている。

## 3 なぜ全体学習なのか

中学生と言えば思春期、発言・発表が少ないと言われるが、この全体学習という取り組みの中で、その学習者に対する意識は大きく変えられていく。どうしてこれほどひたむきに、その考え方や思いが語られていくのか、それは授業者も学習者も共に人権・部落問題を自分自身の生き方に関わる問題であると認識したからである。

そして、そのことが自分を語る発言となり、一人の学習者の発言が他の学習者の多様な発言を引き出し、個々の生き方を語り合う授業展開につながってきたと言える。

この全体学習が築きあげてきた学習の成果は、「生かし、生かされ、生きる」ということであった。それは、共に学習する仲間を盛り立てて、生かすことによって自分も生かされ、学習する一人一人がすばらしい力を發揮して力強く生きるということである。私には、この全体学習によって、事なきれ主義の社会の中にあっても、正しいことは勇気を持って発言できる学習者が育ってきたという確信がある。

なぜ全体学習によって、学習者や授業者の主体性が引き出され、自分自身の具体的な事実を堂々と語り合う討論になってきたのか。これは全体学習という学習形態をとれば、すぐに実現できるという安易なものではない。

しかし、全体学習の取り組みは、これまで行われてきた道徳学習や人権・部落問題学習の既成概念を見事に打ち破ることになった。「中学生は発表しない」という概念は、学習者が主体的に取り組む全体学習の積み重ねによって「どうして中学生がこれだけ話せるのか」という驚きに変わる。また、「部落問題になるとことさら話さないものだ」という授業者の思い込みも見事に打ち破るほど、素直に学習者がその思いを語ってきた。その発言には、被差別部落の学習者が、親や自らの被差別体験を涙ながらに語った発言もあった。また、部落外の学習者が、家族の中にある差別性を告発する発言もあった。

それだけに全体学習に対する賛否の声は、授業者間だけでなく、保護者や地域も含め大きく響きわたった。道徳学習や人権・部落問題学習のあり方を含め、その実践の中身が論議されることは、全体学習を中心に入権・部落問題学習を実践してきた教師集団の望んでいたことであり、むしろ日常的に部落問題が話し合われるきっかけづくりになったことが、これまでの形骸化していた人権・部落問題学習を大きく前進させることになったのである。

板野中学校において全体学習に取り組むきっかけは、人権・部落問題学習において学習者の「沈黙」からくる「重い」「暗い」といった授業を打破することにあった。「重い」「暗い」といった雰囲気は、授業を重ねるごとに「また同和の学習か」という思いを募らせるだけでなく、「もうわかつてない」「差別はしていない」と学習者のやる気を失わせ、さらにその思いが発展すると、「もう差別はないだろう」「教えるからよけいに差別するんだ」と人権教育や同和教育を否定する学習者まで育ってしまう。

多くの授業者は、ここで自分自身に負けてしまっているのではないだろうか。このような現実の中で被差別部落の学習者は、授業者への期待や信頼を失い、自分の心を閉ざし、荒れていき、仲間からも分断されている現実も否めないだろう。

学習者の沈黙の背景には、授業者が「部落問題に対する本当の気持ちを語りきっていない」ということが大きな要素を占めている。さらにその心理の背景には「本気で同和教育に取り組む気持ちが、自分自身の中にあるのだろうか」「差別への怒りを自分自身のものとして捉えきっているのか」という問い合わせに、応え得ることができない自分自身が存在している。いわゆる「差別解消の熱や光を授業者が、自分自身の中でどれだけ持ち得ているのか」ということである。

全体学習が目指してきた学習者と心を通わせ、学習者とつながり、その思いや願いを学年全体で共有し合う営み、それは学習者のみならず、授業者が人間として部落差別を始めとする様々な「差別の檻」から解放される営みである。授業者はここに同和教育の「よろこび」を見い出し、実践を継続していくエネルギーを得ていくようになるのである。

#### 4 「今」「ここ」を語り合う全体学習

板野中学校では、差別解消への思いを同和教育に取り組む仲間と共有していきたいという願いから、全体学習は常に保護者や県内外の教育関係者に公開してきた。その授業の中で学習者が、参観者にも意見を求めることがある。それは、学習者の中にも、授業者の中にも、この取り組みを広げていきたいという願いがあったからである。そして、その願いは一つ一つの全体学習そのものを充実させていくことになる。以上、述べてきた全体学習について、その本質が如実に綴られている参観者のレポートを引用する。

【授業の中で、「今」「ここ」だから言えるという発言、その「今」「ここ」という場を、真剣に生き、活かしている板野中学校の生徒の皆さんに出会うことができたのが、私の全体学習への参加だったと、今、改めて考えている。

私は、高校2年の時、部落問題学習のロングホームルームのためのアンケートに、私のいとこの結婚差別のことを詳しく書いた。みんなにこの現実を知って欲しいという思いで……。ところが、その授業の前に、「このことは、授業中に発表するな」と担任に言われた。理由は、「クラスの他の子たちには、話してもわからんだろうから…」ということだった。私も、それに対して、何も言えなかつた。そして、その授業は、「差別するのはいけない」というタテマエの話だけで過ぎていき、私は、やはり何も言わなかつた。

板野中学校の全体学習のような「今」「ここ」が自分にはなかったことで、部落差別のことをいろいろ言っても仕方ないと思うようになっていた私に、その「今」「ここ」という場を十分に生かし、精一杯友だちの話を聞き、それに返していっている姿に、胸を熱くさせられた。

私には、「今」「ここ」がなかったかもしれないけれど、もっともっとやれることが、言えることがあったはずなのに、私は中学生の時も、高校の時も、そして今でも逃げているという現実に気づかされた気がした。

3年A組の皆さんの公開討論における発言を受けて、徐々に他のクラスの生徒の目が変わっていく。それが、手に取るように発言にも現れてきたのがわかった。時間が許せば、私も何か言いたいという気持ちにさせられた。そんな気持ちにさせてくれたのは、中学生の皆さんだった。ひたむきに現実に立ち向かい、一生懸命、家族のことや友だちのこと、これから的生活のことを見つめ、様々な揺れる思いを語っていく…。その作業は、決して簡単なことではないが、その先に、信頼する友だちが見えるから、心臓が張り裂けそうな思いを乗り越えて、勇気が振り絞れるのだということを見せてもらうことができ、私も、ものすごい励ましをいただくことができた。

生徒の心に寄り添うために、「スクールカウンセラー」などの配置も検討されたり、実際に実施さ

れたりしているが、全体学習という場は、大きなカウンセリングの場にもなっているなあと思う。  
一般的なカウンセリングは、密室で、クライエントとカウンセラーとで行われ、お互いに自己開示  
することで何かをつかんでいくが、全体学習は、公開の場で大勢で行うので、自己開示には、とっ  
ても勇気がいる。しかし、一度つながると、大勢から意見をもらったことで、ものすごい励ましを  
得られ、自分に自信を感じられると思う。全体学習を参観させていただいて、そのことがよくわかった。  
発表を終えた友だちに、同じグループの子がねぎらいの言葉をかけていることや、発表者の  
顔が、ふっと落ち着いた後にきりっとひきしまったことを目撃できたからである。

板野中学校の生徒をとりまく日常の差別の現実の厳しさは、私が遠くからあれこれ言えるものではないことが、いくつかの発言からよく伝わってきた。そんな厳しさの中にあっても「笑って返せるような、いろんな思いを豊かに伝えていける力をつけたい」とさわやかに発言する男の子。「自分が嫌ってわかることを人にしよるっていうことは、この人は嫌なんだろなあってわかるだろう。(中略)当たり前のことを考えて、よく冷静になって考えたら、なんもすごくないわけよ」とさらっと言ってのける女の子…。

純粹さを随分失ってしまっている私は、やっぱりこのような意見を「すごい」と思ってしまった。そして、「すごい」皆さんから、どんどん学びたい、私も私の「今」「ここ」をもっともっと輝かせたいと思い、日常がいい加減になりかけてくると、『峠を越えて』(板野中学校同和教育実践記録)を読む日々を過ごしている。

自分自身を問い直し、友だちの意見をしっかり聞き、自分の思いを語る「今」「ここ」には、それ  
その生徒の居場所がある。だから、みんながキラキラと輝いている。全体学習という形態をまねできなかつたら、それぞれの生徒の居場所とつながる場面を工夫していくことを考えなくてはと、今、ひしひしと考えている。】

全体学習を参観しただけの参観者から届けられたレポートであるが、この参観者は全体学習で自らを語った学習者に応えるように、自分自身を綴っている。そして、全体学習を体感したことについて、全体学習は大きなカウンセリングの場と分析し、全体学習が一人一人の差別意識を洗う学習であることを明確にしている。

また、板野中学校の全体学習を土台として取り組まれた同和教育の具体的な実践に触れた大学生が、自らが受けてきた同和教育を振り返ったレポートに次のようなものがある。

【人権教育・同和教育は「楽しくないと続かない」という言葉が、全体学習の討論から感じることができた。そして、主体的な討論の中に学ぶ楽しさがあることを実感でき、その重要性に気づくことができたことは、今回得られたものの中でも特に印象的であった。中学・高校時代に受けた同和教育は、暗い雰囲気の中で行われ、触れてはいけないものに触れているような後ろめたさがあった。そこには中途半端に知ることの残酷を見て見ぬ振りをする現状があった。同和教育の時間が過ぎると、自分の中に新しく生まれた屈折した感情に気づき、そのたびに暗い気持ちになった。

ところが今回は違った。部落問題と向き合うことは、後ろめたいことでもなんでもない。むしろ、勇気を持って立ち向かうことは、人間としての誇りをかけた闘いであり、美しいとさえ感じた。そこには人ととのつながりが存在し、暗さよりも人間の強さ、明るさが勝っていた。部落問題は確

かに大変な問題である。しかし、それを解決しようとする過程で人間のすばらしさを発見できる。  
そう気づいたとき、私と部落問題の壁が崩れ落ちた気がする。(中略)

私は、今回の講義で感じたことをそのままでは終わらせたくなかった。というより、居てもたつても居られなくなつた。今の私にできることは何なのか考えてみた。そして、まずは自分の中の差別意識の徹底的な解放、次に身近な人への問題提起をしようと考えがまとまつた。そこでさっそく、何人かの友だちに講義のことを話し、私の思いを語つた。すると、思った以上に大きな反応が得られた。実家の周りに存在する差別のことを語り、さらに考えてから手紙にして送ると言ってくれた友だちもいた。今まであまり考えたことがなかつたので、これからは考えたいと言つてくれた友だちもいた。私は、少しでも差別をなくすために行動できた自分と、それを真剣に受け止めてくれた友だちを誇りに思う。同時に、差別は絶対になくすことができると確信した。これからも、身近な人に勇気を持って問題提起することで、自分の中の差別意識と闘つていきたい。(以下省略)】

(広島大学教育学部集中講義「同和教育演習」レポートより)

ここに一方的な価値注入の中で、学習者を無氣力にさせてきた同和教育の現実がある。このレポートはまだまだ続くが、授業者が差別解消への精一杯の思いをぶつけ、その考えを訴えた人権・部落問題学習が、ほとんどの学習者にとって遠い現実でしかない状況、科学的に人間の生き方を認識していく学習が、反証の余地のない閉ざされた学習となつたとき、部落問題を学んでいくことがマイナスにさえなる現実があることを押さえておきたい。しかし、そこに共感的つながりと自他や社会への確かなまなざし、そして、自己への主体的な内省が成立したとき、同和教育は大きな成果を生んでいくことをこのレポートは認識させてくれる。私はこのような同和教育への確信を持ち、日々の実践を積み上げていきたいと考える。

## 5 道徳学習や人権・部落問題学習の三要素

これまでの同和教育を振り返ったとき、いくつかの課題に気づくが、それを私なりに整理すると以下の3点になる。

第1に「共感的つながり」が、授業者と学習者、学習者相互に築かれているかということである。道徳学習や人権・部落問題学習は、自己をみつめ、様々な問題を自己の生き方との関わりの中で捉え、その思いや考えを語り合うことにより、目標達成につながっていく学習である。特に一人一人の生き方に関わる問題である人権・部落問題は、授業者と学習者、学習者相互の信頼関係が、教育の基盤にないとなかなか個々人の内面を語り合う授業展開には至らない。道徳学習や人権・部落問題学習においては、まず「人間関係づくり」が重要な課題となる。そのためには、学級の中に日常的に、自らの思いや願いを表現できる「支持的風土」が確立されなければならない。すなわち、学級集団の中に、「共感的つながり」が成立しているかが重要な課題となるのである。

第2に、学習者が「自己や他者、社会をみつめ、自己の生き方を問う学習」になっているかということである。それは部落問題学習において、部落の歴史（歴史的事実）を単なる知識としてのみ教えていなかつたか。特に、被差別部落の虐げられた面を強調するあまり、被差別部落に対するマ

イナスイメージをつくり出しあはしなかったか。そして、そのことが差別の再生産につながった事実はなかったかということである。それは部落問題学習が、社会的事象や歴史的事象を通して学習者一人一人がじっくりと「自己や他者、社会をみつめ、その時代や地域の社会構造（差別構造）を分析することで、自己の差別意識に気づき、その差別意識を洗い、差別解消の主体者としての生き方を追究していく道徳学習や人権・部落問題学習が創造できているか」という課題である。

第3に、道徳学習や人権・部落問題学習の学習方法・学習形態についてである。いつの場合も「学習の主体者は学習者」である。しかし、人権・部落問題学習では多くの知識伝達を急ぐあまり、授業者的一方的な授業になりがちである。人権・部落問題学習において、じっくりと自己や他者、社会をみつめた学習者自身の生き方やあり方を問う学習課題が設定され、「今」「ここ」にある部落差別を始めとする差別の現実を克服していく「学習者相互の語り合いによる学習」が成立しているか。そして、その発言が観念的、抽象的なものではなく、一人一人の生活に根ざした具体的な事実を通して、「自己の生き方を内省する学習」へと高まっているかという課題である。

私は以上の「共感的つながりをつくる」「自他と社会をみつめる」「自己の生き方を内省する」という三要素を「道徳学習や人権・部落問題学習の三要素」と提起したい。

この三要素を克服することにより、様々な教育活動の中で一人一人の学習者は、授業者の想像を超える輝きを放っていくようになる。私にとって板野中学校における全体学習が拓いてきた教育実践は、上記の三要素を追究にしていく営みであったと言える。この三要素に迫る取り組みを具体的な実践の事実を通して検証していきたいと考える。

## 6 実践記録『峠を越えて』がめざすもの

私の板野中学校での営みは、「道徳学習や人権・部落問題学習の三要素」から、学習者一人一人が生き生きと「自己を語り、他者とつながるよろこび」を共有していった教育の営みであった。

板野中学校で積み上げてきた具体的な授業実践を中心に、「道徳学習や人権・部落問題学習の三要素」が、どのようにして機能し合い、どのように展開されていったのか、今まで出会ってきた学習者との関わりや営みを吟味しながら、そこに展開された授業の具体的な記録を通して、道徳教育や人権教育、同和教育のあり方を追究していき、学習者一人一人の生命が輝く授業展開の一般化を図っていかなければと考える。

以上の課題を具体的な実践の事実から検証・吟味し、それぞれの課題に迫っていくために、本冊子『峠を越えて』の章立ては以下のように構成する。

第1章「共感的つながりをつくる」

第2章「自他と社会をみつめる」

第3章「自己の生き方を内省する」

第4章「自己を語り、他者とつながるよろこび」

次に各章の内容についてであるが、それぞれが道徳学習や人権・部落問題学習の取り組みを総合的に考え、学習者一人一人の主体性を大切にしてきた授業実践であり、その授業実践につながる日

常の教育活動や私の教育観をまとめた記録である。

本冊子『峠を越えて』の各章における内容は、以下のように構成されている。

第1章「共感的つながりをつくる」では、この課題を克服していくために、学級開きがいかに重要であるかを訴えている。学年のスタート、4月の出会いには夢がある。授業者にも学習者にも保護者にも不安はあるが、それを遙かに越える期待とやる気がみなぎっている。学習者一人一人の期待とやる気を具体的な実践を通して検証していくために、「人間関係を構築する学級開き」から『『安心』のある教室をつくる参観授業』について、具体的な「学級開きの語り」と、学習者一人一人が主体的に取り組む具体的な4月の参観授業の方法論についてまとめると共に、そこから「人間的つながりを深める家庭訪問」について、保護者との具体的な語り合いの事実を通して考える。

そして、私自身の思い上がりを徹底的に認識させていただいた「坂村真民先生との出会い」について振り返ってみたい。坂村先生と出会ったのは、今から13年前、そのときの言葉は今も鮮やかによみがえる。まさしく一期一会であり、先生と過ごした2時間余りが、今も私の中に様々な思いを引き出してくれる。今一度先生との時間を「自問自答」したいと考える。

第1章のまとめは、私の教育の原点である「佐藤文彦先生との出会い」について綴らせていただくことにする。

「共感と連帯の絆を教室につくるんです」「悲しみがみえなくて、幸せがみえるでしょうか」

「教育は互いへの信頼と尊敬ですよ」「人間は愛を原理として生きているんです」

今も目を閉じると穏やかに語られる佐藤先生の言葉がよみがえる。佐藤先生の講演記録と、卒業生へのメッセージを引用させていただき、共感と連帯の絆に支えられた教育活動の重要性についてまとめることにする。そして、共感的つながりに支えられた教育の可能性と「よろこび」について吟味・検証したいと考える。

第2章「自他と社会をみつめる」では、共感的つながりを基盤にして取り組んだ社会科における人権・部落問題学習（以下・社会科人権学習）についてまとめている。私は、2000年度より2年間、鳴門教育大学大学院で『社会科人権学習の改善』－「内省」を目標原理とする中学校社会科授業の展開－という論文をまとめた。それは、社会科で取り組まれる人権・部落問題学習の内容を具体的に検証することにより、これまでの形骸化した他の教科や領域における人権・部落問題学習の課題を明らかにしていくことにつながっていくと考えたからである。

その論文の中で私は「内省」を目標原理とする社会科人権学習を展開するために、「共感」「分析」「批判」という方法原理を提起している。その社会科人権学習の理論に基づいて学習者の主体的な討論で追究された中学校歴史的分野「江戸時代の身分制度」の学習を通して、「自己の差別性を問う社会科人権学習」のあり方を探りたいと考える。

次に、「ハンセン病差別が訴えるもの」として、元ハンセン病者であり、国立ハンセン病療養所である長島愛生園（岡山県邑久郡邑久町虫明）で暮らしている金泰九さんの講演について語り合った人権学習の記録を掲載する。この授業で検証された自他と社会をみつめる嘗み、それは人間の無知による差別から解放されていく嘗みであった。

一つの授業がどのような成果を生んでいくのか、そんな具体的な授業の事実を吟味・検証しながら

ら、自己の差別意識から解放されていく「よろこび」に迫りたいと考える。

そして、自己や他者、社会の現実をみつめ、自己の生き方やあり方を問う社会科学習の具体的な実践として、「環境問題について語り合った社会科学習」と「基本的人権について追究した社会科人権学習」を取り上げる。

ここで引用する社会科環境学習や社会科人権学習は、いずれも学習者一人一人の中に築かれた人間関係を基盤にした授業実践である。そして、この中学校での授業実践を基盤に「高校生が取り組んだ人権・部落問題学習」を引用させていただいた。この授業での発言の深まりは、中学校での取り組みが基盤にあってのものであるが、そのような授業がどのように成立するのか、その内実に迫っていきたいと考える。

第3章「自己の生き方を内省する」では、全体学習を通して深く自己の生き方を内省していく授業展開について分析する。なぜ全体学習という取り組みが、学習者一人一人にその内面をみつめさせ、自己との対話を通して深く自己の生き方を内省することに至ったのか、また他者の思いに寄り添い、自己のあり方を問う学習へと深まっていったのか、その具体的な授業展開を検証をすることによって、これから道徳学習や人権・部落問題学習について追究していきたいと考える。

そのためにまず、ここでは「自己の生き方を考える全体学習」というテーマで、なぜ全体学習という学習形態が、生徒や教師の魂を揺さぶる学習になっていったのか、その節目となった資料『私の目をみて！』の全体学習にふれ、私自身が解放されていった全体学習翌日の授業についてまとめるにすることにする。

そして、全体学習が築き上げた学習者一人一人の共感的つながりが、自己の生き方を主体的に内省させていく授業実践となっていった「1991年度板野郡同和教育研究大会公開授業」「第25回全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業」「第21回徳島県中学校同和教育研究大会公開授業」についてまとめるにすることにする。

それぞれの研究大会は、6月、10月、11月と学習者相互の「共感と連帯の絆」の深まりの中で、人間教育としての同和教育の「よろこび」を発信していく授業となつたが、学習者一人一人が主体的に内省し、自己をみつめ、語り、他者とつながる教育の成果が、それ以後の教育実践に大きな影響を与えていった授業である。

特に、全体学習が築き上げてきた教育の成果を全国に発信することになった「全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業」について、その指導案と資料『ナイン』(井上ひさし)も引用しているが、この「全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業」は、全体学習から仲間との絆を深めていった学習者が、差別やいじめをなくしていく教育の重要性を全国に発信し、当時文部省（現・文部科学省）が、部落問題を取り上げた資料として『峠』『スダチの苗木』を『中学校道徳教育読み物資料とその利用』に掲載するきっかけとなつた授業である。

中学生が自己の生き方を主体的に内省していく資料として作成した『スダチの苗木』『峠』が、文部省から発信される営み、それはまさに私自身が解放されていく営みであり、人と人とのつながりのすばらしさを学ばせていただいた感動の日々であった。その場面を振り返りながら、そこで出会わせていただいた先生方への感謝の思いを込めて、今一度「文部省道徳教育読み物資料作成協力者会

議」の営みをまとめてみたいと考える。

第4章「自己を語り、他者とつながるよろこび」では、まず全体学習が大きな成果を生んできた根本的要因である教師自身の解放についてまとめておきたい。全体学習はその指導案の主題設定の理由に教師自身を語ることで確かなものになってきた。

ここでは、教師自身が自己を語り、解放されていくことの重要性について検証していくために、その具体的な主題設定の理由の文面を引用する。

次に同和教育の成果と課題を検証していくために、板野中学校の全体学習の実践にふれた広島大学教育学部の集中講義「同和教育演習」のレポートから、その本心を語り合う道徳学習や人権・部落問題学習の重要性を「濃いグリーンに髪を染めた大学生」というテーマでまとめている。人間関係の希薄さから表面的にしらけたふりをしているが、実は小学生も、中学生も、高校生も、そして、大学生も人間について深く学び合う「よろこび」を求めている。

そこに共感が生まれ、仲間とのつながりが成立したとき、その学び合いは、学習者の想像を遙かに超える「よろこび」となる。自己を語り、他者とつながっていく同和教育の「よろこび」を集中講義「同和教育演習」でのドラマを振り返りつつ検証していきたいと考える。

そして、生徒の要求で実現し、進路決定の不安定な時期を自己を語り合う道徳学習を通して、一人一人がつながり合い、その生命を輝かしていくといった「映画『学校』について語り合った道徳学習」を紹介し、その具体的な発言を吟味しながら、自己をみつめ、語り、他者とつながる道徳学習や人権・部落問題学習のあり方について検証していきたいと考える。

最後に全体学習の具体的な授業を通して、自己を語り、他者とつながる全体学習のよろこびについて吟味・検証していきたい。その具体的な全体学習として、「立江中学校交流全体学習」と「弥栄中学校ジョイント人権学習」を取り上げ、その本心を語り合うことによって一人一人の差別意識が洗われ、学習者の自己変革がおこっていった事実を具体的な授業の記録から検証していき、そこに形成される人間的つながりについて考えていきたい。

それは、それぞれの全体学習の中で語られた発言が、仲間の内面を揺さぶり、その精一杯の思いを引き出していった授業であるが、そこに生まれる感動や目覚めは、一人一人の学習者の中にいつまでも脈々と生き続けている。共感的つながりを土台として、自他や社会をみつめ、自己の生き方を内省していく全体学習の実践を通して、人間教育としての道徳学習や人権・部落問題学習の「よろこび」について追究していきたいと考える。

終章は、「美しさを求めて生きる人生を」というテーマで、これまでの全体学習が拓いてきた教育のよろこびについて、その具体的な実践の事実をまとめている。ここでは、教師の生き方と、生徒の変容について、同和教育の実践を象徴する営みを掲載している。

人権教育・同和教育は具体である。ここに掲載した事実を自らに問い合わせながら、「今」「ここ」で自分の何ができるのか、自問自答を繰り返し、更なる教育の前進を目指したいと考える。